



ヒューマン・ネットワーク  
人づきあいの経済学  
マシュー・ジャクソン 著／依田光江 訳  
早川書房 (2020年11月) 2,000円+税 / 344ページ

## つながりは、 時に格差や不平等を生む

われわれは、全員が多かれ少なかれ他者とつながって生きている。そして、人と人のつながりにおいては、「中心人物」ともいべき人がいる。この中心人物にとって情報の拡散や収集は容易である。また、中心人物は他者と他者のつながりを仲介できるような、有利なポジションにいるといえるかもしれない。いわば「人気者」的な位置にいるといえるだろう。

このようなつながりによって、当然ながら、われわれの行動は他者の行動に影響を与えるし、われわれも他者からの影響を受けない。多くの人間同士がつながることで、利益がもたらされることもあればデメリットになることもある。人と人とのつながりはわれわれに何をもたらすのか。スタンフォード大学のマシュー・ジャクソン教授による本書は、この問題を考えるのに最適な文献である。

つながりはわれわれに利益をもたらす。例えば、われわれが生きていく上で有益な情報やコネクションはつながりを介してもたらされる。また、人は自分と似た人間とつながりたがる傾向を持つ。こうした近しい人間同士のネットワークを介して、困ったときに手を差し伸べてくれる人がいるかもしれない。似た者同士のつながりは自分に近い人間の行動を予測しやすく、助け合いやすい。ストレスも少ない。

だが、つながりはデメリットを生む可能性もある。伝染病、デマ、金融危機などは、まさに人々のネットワークを介して拡散されるからだ。SNSなどの発達は、似た者同士がつながることで「同類性」が強化され、さらに類似した意見を共有するコミュニケーションは「同質性」を強め、自らの意見を一層強硬にする。同質性の強い集団は、異なる集団の意見を受け入れずに対立を深める。似た者同士のみでつながっている集団は、しばしば互いに孤立して閉鎖的だ。

進学や就職に関する有益な情報は、自らが所属している集団とは異なる集団からは得にくい。これは格差や不平等をもたらす一因になり得ると指摘されている。

現代においては、技術革新や国際化の急速な進行により、他者となることが容易になった。つながりの在り方自体も刻一刻と変化していく。そういう時代だからこそ、われわれは良い結果をもたらす、良質なつながりを模索するべきなのだろう。